

歌語「夕顔」小考

植 木 朝 子

『源氏物語』夕顔巻で印象的に描写されて以来、夕顔の花は、和歌や意匠の世界で盛んに取り上げられてきた。「夕顔」が歌語として定着する上での『源氏物語』の重要性はしばしば指摘され、特に「夕顔」が初めて歌題となった『六百番歌合』の和歌が「源氏物語」の場面取りの観を呈している^① ことについては多くの言及があるが、『六百番歌合』以後の展開や、『源氏物語』とは距離を置いた夕顔詠についてはあまり注意が払われてこなかったように思われる。本稿では、「夕顔」の和歌を時代の流れに沿って辿り、「夕顔」のイメージの広がりを考えてみたい。

一、「源氏物語」前後

先にもふれたように、「夕顔」は、『源氏物語』に取り上げられてはじめて和歌に詠まれるようになったといつてよい素材である。紫

式部と同時代の赤染衛門が「あさがほゆうがほ植ゑて見しころ」の詞書で「ひるまこそなぐさむかたはなかりけれあさゆふかほの花もなきまは」（赤染衛門集^②）と詠んでいて、夕顔が鑑賞されていたことはわかるが、和歌の中心は、昼、朝、夕の言語遊戯にあつて、夕顔の花そのものに焦点を当てたものではない。『枕草子』「草の花は」には、「夕顔は、花の形もあさがほに似て、言ひつづけたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、実のありさまこそいとくちをしけれ。など、さはた生ひ出でけん。ぬかづきなどいふ物のやうにだにあれかし。されど、なほ夕顔といふ名ばかりはをかし」^③とあり、朝顔に似ているところと名前の面白さは評価しながらも、実の不恰好な様子を「いとくちをし」とする。このような状況の中で、『源氏物語』夕顔巻を見ると、夕顔の花への興味は突出したものとさえいえる。光源氏は大弐の乳母の病氣見舞いに、五条の家を訪ね、車を入

れるまでの間、隣の家に目を留める。以下に本文を引用する。

切懸だつものに、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれ
るに、白き花ぞおのれひとり笑みの眉ひらけたる、「遠方人に
物申す」とひとりごち給ふを、御隨身ついゐて、「かの白く咲
けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、かうあやしき
垣根になん咲き侍りける」と申す。

げにいと小家がちにむつかしげなるわたりの、このもかのも、
あやしくうちよるほひてむねむねしからぬ軒のつまなどに這ひ
まつはれたるを、「くちをしの花の契りや。一房折りて参れ」
とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。

さすがにされたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴長く着なした
る童のをかしげなる出で来て、うち招く。白き扇のいたうこが
したるを、「これに置きて参らせよ。枝もなさけなげなめる花
を」とて取らせたれば、門あけて惟光の朝臣出で来たるしてた
てまつらす。(中略) ありつる扇御覧ずれば、もて馴らしたる
移り香いと染み深うなつかしくて、をかしうすさみ書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花
(中略) 御畳紙にいたうあらぬさまに書き変へ給ひて、

寄りてこそそれかとも見めたそかれにはのぼの見つる花の

夕顔

ありつる御隨身して遣はず。^④

光源氏は隣家の垣根に咲く花の名前を知らなかつたので、「遠方
人に物申す」と独り言を言う。これは、『古今集』の旋頭歌「うち
わたす遠方人に物申す我そのそこに白く咲けるはなにの花ぞも」を
引いたもので、そこに咲いている白い花はなんとという名前なのか、
という質問になる。源氏の言葉聞きつけた隨身が「夕顔」という
名を教え、源氏の求めに応じて、夕顔を手折っていると、遣戸口か
ら、女童が出てきて、香をたきしめた白い扇を差し出し、夕顔の花
を載せるように言う。乳母を見舞つた後、扇を見ると美しい筆跡で
和歌が記されており、心惹かれた光源氏は、素性を隠して女君と契
りを結ぶ。某院に連れ出した折にも、夕顔を詠み込んだ次のような
和歌のやりとりがある。

「夕露に紐とく花は玉鉾のたよりに見えしえにこそありけれ
露の光やいかに」との給へば、しり目に見おこせて、

光ありと見し夕顔のうは露はたそかれ時のそら目なりけり
とほのかに言ふ。

この夜、物の怪が現れて、夕顔は息を引き取り、この恋は佛く終わ
る。『源氏物語』における夕顔の描写を確認すると、まず、白くひ
とり微笑んでいるように咲いていること、身分の低い階層の家にあ
ること、蔓性の枝が垣根や軒に青々と這いかかっていることがあげ

られる。また、この場面で引用されたことによって、『古今集』の旋頭歌も、夕顔という素材と強く結びつくことになった。さらに、夕顔の女君が生来怖がりで弱々しく、最終的には物の怪に命を奪われるという物語の流れは、夕方に咲いて、すぐにしぼむ花の性格と重なって、夕顔のもろく儂いイメージを増幅させている。

和歌における夕顔の用例のうち、先にあげた赤染衛門の歌について古いのは、「卯の花、夕顔に似たり」という題で詠まれた大江匡房（一〇四一〜一一二一）の「けさ見ずはまがひなましを夕顔に垣根に白く咲ける卯の花」（江師集）である。ただし、これは、卯の花が中心であって、夕顔そのものに焦点が当てられているわけではない。夏の白い花であるという点に卯の花と夕顔の共通性を捉えているらしいが、両者の花の形態は全く似ていないため、「卯の花、夕顔に似たり」という題自体、あまり普遍性があるものとは思われず、実際、この後の和歌で、卯の花と夕顔を共に詠むものは、室町期まで下り、江戸期まで含めても以下の数例が見出される程度である。

卯花のうづみし雪のむら消や宿の垣ほにのこる夕顔

（拾塵集）〔大内政弘・一四四六〜一四九五〕

卯花の散りし垣根にさらに又おなじ色にもかかる夕顔

（柏玉集）〔後柏原院・一四六四〜一五二六〕

水無月の照る日までやは卯花も雪の垣ほを夕顔の花

（逍遊集）〔松永貞徳・一五七一〜一六五三〕

卯花は日数へだつる垣ほにも残る色かと咲ける夕顔

（後水尾院御集）〔後水尾院・一五九六〜一六八〇〕

白妙の卯花垣の夕顔はふりつく雪のここちこそすれ

（浦のしほ貝）〔熊谷直好・一七八二〜一八六二〕

匡房の後、夕顔の花を詠んだ歌人としては、源俊頼（一一〇五〜一一二八）がいる。

山がつのすどがたけがき枝もせに夕顔なれりすかひすかひに

夕顔のしげみにすだくくつわ虫おびたたくもこひさげぶかな

（以上、散木奇歌集）

俊頼の和歌にはしばしば大胆自由な発想が見られるが、一首目は、花ではなく、次々に生る夕顔の実を取り上げている。また二首目は夕顔の茂みでかしましく鳴くくつわ虫に焦点が当てられていて、全体的に儂さよりもにぎやかな趣を感じさせる。続く源頼政（一一〇四〜一一八〇）は、「夕顔の心を述懐によせてよみ侍りしに」の詞書で、「世中を後ろになせる山里に先さしむかふ夕顔の花」（頼政集）という歌を詠んでいる。「夕顔」から人の顔を連想しており、正面から見るとこちらに向かって来るように開く筒型の花の形も意識され、ほのかなおかしみも感じられる。西行（一一一八〜一一九

○) になると、「山がつの折かけがきのひまこえてとなりにもさく夕顔の花」「あさでほすしづがはつ木をたよりにてまとはれてさく夕顔の花」(以上、西行法師家集)と、夕顔の花そのものに関心を寄せた詠歌が見られるが、隣にまで咲きこぼれ、這いのびていく生命力が詠まれて、儂い花という把握はなされていない。このような経緯を辿った後、『正治初度百首』の夏の歌に夕顔詠がまとまって見られる。

山がつの露のなさけをおけとてや垣ほにみする夕顔の花

(通親)

隙もなく軒をならぶる山がつのすまひをわかつ夕顔の花

(生蓮)

しめはふるきねが外面の柴のとに又さきかかる夕顔の花

(讃岐)

咲きにけり遠方人に事問ひて名を知りそめし夕顔の花

(小侍従)

これらのうち通親・生蓮・讃岐の詠歌は相対的に低い身分の家の垣根に咲く夕顔の花を歌う。また通親詠と小侍従詠は『源氏物語』夕顔巻を踏まえ、男女の出会いを想起させるものとなっている。

夕顔は『六百番歌合』において夏の歌題になるに至る。以下、判詞を除いて、『六百番歌合』の夕顔詠をあげる。

片山の垣根の日影ほの見えて露にぞうつる花の夕顔
折りてこそ見るべかりけれ夕露に紐とく花の光ありとは (良経)

(家房)

これやこの人めも知らぬ山がつにさしのみ向かふ夕顔の花

(兼宗)

しづの男が片岡しめて住む宿をもてなす物は夕顔の花 (慈円)

蚊遣火の煙いぶせきしづのいほにすすけぬ物は夕顔の花

(季経)

煙立つしづがいほりか薄霧のまがきに咲ける夕顔の花 (家隆)

暮れそめて草の葉なびく風のまに垣根涼しき夕顔の花 (定家)

日数ふる雪にしほれし心地して夕顔咲けるしづが竹垣 (経家)

おのづからあはれぞ見ゆる荒手組むしづがそもの夕顔の花

(顕昭)

山がつの契りのほどや忍ぶらん夜をのみ待つ夕顔の花 (寂蓮)

むぐらはふしづが垣根も色はえて光ことなる夕顔の花 (有家)

たそかれにまがひて咲ける花の名を遠方人や問はば答へむ

(隆信)

これらの和歌の傍線を付したところは、先に引用した『源氏物語』の本文を明らかに引いているものである。点線を付したのは、「しづ」「山がつ」など、身分の低い者を表す言葉で、『源氏物語』

本文の「かうあやしき垣根になん咲き侍りける」という随身の言葉と対応する。身分の低い者の粗末な家に咲くという把握が基本であるが、涼しげな花、趣深い花としての肯定的評価も見られる（定家・顕昭）。また、寂蓮詠は、「契り」という言葉を使って、夕顔の花を擬人化し、山がつの恋人と見立てているが、この「契り」の語は、『源氏物語』本文に「口惜しの花の契りや」と否定的に出てくる。低い階層の家に咲くのが、この花の気の毒な運命だということ

であるが、夕顔の物語を結末まで知れば、夕顔の女と光源氏との契りは、結果的に死を招くため、意味深長な言葉と受け取れよう。隆信詠に含まれる「遠方人」は、『正治初度百首』小侍従詠にも見えるが、『源氏物語』が引用する前掲の『古今集』旋頭歌による言葉である。この旋頭歌の「返し」として「春されば野辺にまづ咲く見れど飽かぬ花まひなしにただ名のるべき花の名なれや」が続く。隆信詠に対しては、左の方人が「遠方人に物申すといふ歌は、夕顔の事とは見えずや」と批判しており、それを受けて、俊成も判詞で「右歌、遠方人の本歌、返事の歌に春さればといへり、夕顔にはあらざるべし」と、その主張を認めている。しかし「源氏にはただ當時白く咲ける花を見て、遠方人とはいはせたり、隨身聞き知りてかれをなん夕顔と申すといはせたる、又僻事にあらず」として非難には当たらないとの考えを示す。しかし問題は「今の歌は偏に源氏

を思ひて詠めり、不可然、源氏のためにも悪しくなりぬべし」ということで、ひたすら『源氏物語』の場面を念頭に置いていることには俊成は批判的である。ただし、実際の用例からすると、「偏に」の程度をどう考えるかという問題はあるものの、夕顔を詠んだ和歌が『源氏物語』の影響から全く離れていることはまずほとんどないと言ってよい。

以上のように、『源氏物語』で印象的に取り上げられ、『六百番歌合』で歌題になったことにより、粗末な家に咲く夕顔は、夏の景物として一定の地位を獲得し、『源氏物語』の場面とも重ねられて、光や露と共に詠まれた。さらに時代が下ると、夏の景物としての夕顔を詠むだけでなく、夕顔の花に儂い恋を重ね合わせたり（如願法師集・実材母集、扇に置いた夕顔の花（草根集・松下集・逍遊集）が詠まれたりするようになる。出会いの場面を引くだけではなく、夕顔の女君の死による恋の終りまでを視野に入れて物語世界を一層色濃く揺曳した詠歌が見られるようになるのである。扇と夕顔の取り合わせについては節を改めて述べることにし、ここでは如願法師（一一八四～一二四〇）、実材母（？～永仁（一一九三～九九）初期？）の例をあげておく。

忘れぬはかたみばかりをとどめおきてはかなく消えし夕顔の露
（如願法師集／寄源氏恋を）

むすびおく契もあだにはかなきは露消えはてし夕顔の花

(実材母集／源氏の名の続歌、人人のよみはべりしをり 夕顔)

二、勅撰集に採られた夕顔詠

『源氏物語』以後、夕顔の和歌はある程度の用例を拾うことができが、勅撰集にはほとんど採られていない。以下の八首がその全用例である(『続後拾遺集』の物名の歌一例は除く)。

白露のなさけ置きける言の葉やほのほの見えし夕顔の花

(新古今集・夏・藤原頼実)

みちのべのはにふのこやのほどなきにあまりてかかる夕顔の花

(新古今集・夏・平政村)

咲きにけり……(前掲正治初度百首)(続古今集・夏・小侍従)

いとど又光や添はん白露に月待ちいづる夕顔の花

(新後撰集・雑・津村国助)

このうちも猶うらやましまがらの身の程かくす夕顔の宿

(玉葉集・雑・寂蓮)

咲きてこそしづが垣根の数ならぬ名もあらはるれ夕顔の花

(新続古今集・夏・藤原為盛)

源氏物語の揚名介の事を忠守朝臣に尋ね侍るとて申しおく
りける
藤原雅朝朝臣

つたへおく跡にもまよふ夕顔の宿のあるじのしるべともなれ

返し

丹波忠守朝臣

心あてにそれかとはかりつたへきてぬしさだまらぬ夕顔の宿

(新続古今集・雑)

頼実詠は、『源氏物語』の、夕顔と光源氏の贈答歌から「白露」

「ほのほの見」といった重要な言葉そのまま引き、さらに、二人の逢瀬を「なさけ置きける」と要約したような詠歌になっている。

政村歌は、粗末な家に豊かに咲く夕顔の花を詠む定型なもの、国助詠は、「光添ふ」「白露」を『源氏物語』の和歌から引きながら、

素材として「月」を加えている。夕顔と月を取り合わせた和歌は、家隆「天のはら空ゆく月や契りけんくるれば白き夕顔の花」(壬二

集)や定家「木のまもる垣根にうすきみか月の影あらはるる夕顔の花」(拾遺愚草)の例が早い。この後、夕顔と月を取り合わせた詠

歌は、鎌倉期にはほとんど見られないが、室町期以降になると、『沙玉集』『草根集』『続亜槐集』『卑懐集』『柏玉集』などに散見し、

夕顔、露と重ねて白さを強調する月や、露とあわせて「光」に焦点を当てた月が詠まれている。

『玉葉集』の寂蓮詠は、『夫木集』や『六華集』に採られ、また『平家物語』や『今物語』にも見えることから、広く知られていたことがわかるが、夕顔の花ではなく実を取り上げる狂歌と言えよう。

『新統古今集』の夏歌は、夕顔の花の名前を問題にしたもので、『源氏物語』および引歌の『古今集』旋頭歌を背景にしている。雑歌は、源氏学で「難義」とされた「揚名介」についての質問と答えであるが、答歌は『源氏物語』の和歌を引きながら、自分の学識を謙遜したものであり、夕顔の花そのものに焦点を当てた歌ではない。以上のように、夕顔は、勅撰集で正面から取り上げられる素材にはならず、数少ない用例もほとんどが『源氏物語』の影響下にあったが、政村詠の「月」との取り合わせや寂蓮詠の実（瓢箪）への視線など、新しい詠み方が模索された跡も見受けられる。第三節では、夕顔と取り合わされる素材の面から、また、第四節では、注目される歌人の面から、夕顔の和歌の展開を辿ってみたい。

三、夕顔と取り合わされる素材

夕顔はこれまで見てきたように、身分の低い者の家に咲くという把握が第一であって、夕顔を詠む和歌には、「山がつ」「しづ」「垣」「軒」といった言葉が頻出する。さらに、『源氏物語』の影響で、「光」「露」も多く詠まれ、「遠方人」も散見する。

『源氏物語』本文にはない言葉で、夕顔と共に詠まれるものとしては「蚊遣火」がある。『六百番歌合』季経の歌に初めて見え、その後、「山がつの軒にふすぶる蚊遣火の煙にくもる夕顔の花」（檜葉

集・貞延法師）、「夕顔の花咲きかかるあづまのまやのあまりにたつる蚊遣火」（隣女集）、「こがしけん扇はしらず蚊遣火の煙にくもる夕顔の宿」（草根集）、「月影に色そひても蚊遣火の煙にくもる夕顔の花」（三草集）、「夕顔の花見がてらに涼みけりせとのすくも火蚊遣にはして」（調鶴集 などの例がある。『徒然草』で、各季節の風流なものを並べたところに「水無月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれ也」（十九段⁵）と見え、印象深いのが、夕顔との取り合わせが定型化していると言えるほど多くの用例はない。

右の『草根集』に含まれる「扇」の語は、『源氏物語』を媒介にして夕顔と取り合わされることになり、扇に乗せた夕顔の花は、意匠・文様の世界では夕顔巻の象徴的表現としてしばしば用いられる。『前権典厩集』に「逢ひ難くして逢ひたりける女の、扇を取りかへて侍りけるが、夕顔をかきたりけるをば見るにつけても、もよほさるる心地の苦しければとて、返し遣はしけるそばにかかむとてこひ侍りしかば」の詞書で「うちとけて寝られし時の夢なれや見し夕顔の花の下紐」とあり、夕顔の描かれた扇が出てくる。『源氏物語』に記された、扇に夕顔の花を載せる逸話が広く浸透し、扇そのものに夕顔を描くデザインが出てきたものと思われる。能「班女」でも、野上宿の遊女・花子と吉田少将とが扇を交換するが、少将の手に

渡った花子の扇は「夕顔の花を描きたる扇」^⑥であった。このように、デザインとして印象の強い夕顔と扇の取り合わせであるが、和歌にはさほど取り上げられなかった。その中で、正徹（一三八一～一四五九）の『草根集』には、次節で見るように、夕顔と扇を共に詠み込んだ歌が五首見出され、注目される。正徹の弟子・正広（一四一二～一四九四）にも「誰か見るをらで其ま夕顔の花を扇にいだす月影」（松下集）の例が見られる。近世に下つても、貞徳、宣長（一七三〇～一八〇二）が、「風のうへに咲くかとみえて涼しきは扇にのせし夕顔の花」（逍遊集）、「夕顔の露かけそめし言の葉ぞつひにあふぎのつまとなりぬる」（鈴屋集）といった和歌を詠んでいる。当然ながら、自然界において扇と夕顔とが共に存在することはあり得ず（扇を月の比喩とした場合は自然界にあり得る組み合わせだが、夕顔を詠む時に、月の比喩として「扇」が出てくること自体が、『源氏物語』の影響と考えられる）、『源氏物語』の介在なくして、両者の組み合わせはなく、従って、扇と夕顔を共に詠む和歌は、物語で描かれる、夕顔の女君の死や、それによって儚く終わってしまった光源氏との恋をほぼ確実に連想させるものとなる。

なお、意匠の世界で、扇と並んで、夕顔と組み合わせられることの多いのは牛車であるが、車と夕顔を共に詠み込んだ和歌として管見に入ったのは、「五条花開の宿にて会有りしに、夕顔を」の詞書

で詠まれた『逍遊集』の「小車のむかしのたちど名にしおはばそごど我に夕顔の花」のみであった。

流水と桜、紅葉と筏など、和歌で多く組み合わせられる素材が、デザインの世界でも頻繁に取り上げられていくことは多いが、夕顔と扇、夕顔と車の取り合わせは、意匠の世界と和歌の用例で取り上げられる頻度に大きな差がある。自然物と人工物の取り合わせは、季節の歌として詠んでいくには違和感があつたものだろうか。

四、定家、正徹の夕顔詠

歌語としての「夕顔」の歴史を辿る中で注目される歌人は、先にも一部ふれたが、定家と正徹である。本節では、夕顔の詠まれ方について、この二人に焦点を当てて考察したい。

定家の夕顔詠は『拾遺愚草』から五首拾うことができる。

- A 暮れそめて草の葉なびく風のまに垣根涼しき夕顔の花
 - B 山のかげおほめく里に日ぐらしのこゑたのまるる夕顔の花
 - C わたりする遠方人の袖かみやみづのに白き夕顔の花
 - D 木のまもる垣根にうすきみか月の影あらはるる夕顔の花
 - E この比はしづがふせ屋のかきならび涼しく咲ける夕顔の花
- Aは『六百番歌合』で詠まれたもので、風になびく葉と涼しげな花を詠んでいる。Bでは夕顔が蝸の声と取り合わされている。山の影

がぼんやりしているという夕暮れの風景の中で、寂しげな蝸の声と
儚く美しい夕顔の花が夢まぼろしのように捉えられていると言え
よう。蝸と夕顔の取り合わせは、この後定着することではなく、わずか
に『雪玉集』に「日ぐらしのなく山かげの夕顔はただ山がつの花と
やはみむ」の例が見出される程度である。Cは美豆野という地名と
共に夕顔が詠まれた最初の例である。美豆野は宇治川、木津川、巨
椋池に囲まれた場所で、牧場があり、和歌においては、イネ科の多

年草である真菰がよく詠まれた。夕顔と美豆野の取り合わせは、正
徹にまともって例が見られる他は、正広と政弘に「雪うづむこしの
ひら屋の面影を夏にみづのの夕顔の花」（松下集）、「夕顔は美豆野
に暮れてうちわたすをちかた白き淀の川波」（拾塵集）の一例ずつ
が拾える程度で、夕顔は美豆野の景物として定着するには至ってい
ない。定家のC歌の場合、「美豆野」の「み」は、目で見える意の
「見」と掛詞になっていて、「遠方人」の白い袖と夕顔の花とを重ね
る幻想的な詠みぶりになっている。正広詠・政弘詠にも「見」との
掛詞が使われ、また政弘詠は定家の歌を引きながら、「白」を遠方
人の袖から波に展開させている。Dは、夕顔と三日月の取り合わせ
で、美しく幻想的な世界を提示している。月については第二節でふ
れたが、夕顔と三日月の取り合わせは他に例が見られない。Eは、
粗末な家に咲くという夕顔の一般的な捉え方にのっとったもので、

Aと同じく涼しさが強調されている。以上のように、定家の夕顔詠
は、涼やかな花の様子を表現し、夕日や三日月の淡い光や遠くには
のかに見える幻影のような白い袖、寂しげな蝸の声などを取り合わ
せて、幻想的な世界を構築していると言えよう。『源氏物語』の知
識は当然の前提としてありながら、物語とは別の新しい世界を示し
ている。

次に、正徹の夕顔詠を見る。

- ① こととへよなにの花とかしら露の遠方人の宿の夕顔
- ② しづが屋のおやのかふこがしろたへにまゆひらけたる夕顔の花
- ③ しづが屋ぞ花にかたぶく夕顔のなれるや重き軒はなるらん
- ④ 夕顔の花もちりうせぬ松のかき青葉ひまある山がつの宿
- ⑤ 里つづくみづのやいづこ夕顔の花の波よる淀の川ぎし
- ⑥ 里つづくみづの入江のおもだかもさく色白き夕顔の花
- ⑦ いづれかとあらそふ秋のしら露は扇に置きつ夕顔の花
- ⑧ 秋かけてたのむ軒ばもかたぶきぬ古屋に咲ける夕顔の露
- ⑨ 一枝の花をぞ置ける夕顔の垣ほの月の白き扇に
- ⑩ 咲かぬまも垣根つづきの夕顔をみづのにかくる淀の川波
- ⑪ 咲きぬべき花はけぬべき雪にして夕顔おもき軒ぞかたぶく
- ⑫ こがひしてえびらおくやの軒ばとやまゆひらけたる花の夕顔
- ⑬ 山がつの庭にはかなきくひ垣もみやびかにさく夕顔の花

- ⑭しづがすむわら屋にかかる夕顔の実さへ花さへあくる軒かな
 ⑮暮れやらぬ日影にしばむ夕顔の葉風の花や露を待つらん
 ⑯しづが屋に糸くりはてし新桑の又まゆひらく夕顔の花
 ⑰さるかたに見ぞ捨てられぬ夕顔はしづが垣ほの花に咲くとも
 ⑱かさこむるみづのの岸による淡の消えぬも咲ける夕顔の花
 ⑲板まもる露さへ涼しかねさす檜垣にたゆる夕顔の花
 ⑳夕顔の花のえたかき籬より白き扇をいだし月影
 ㉑夕顔の花のかづらや荒手組む賤が垣ほのねりそなるらん
 ㉒枝もふす賤がぬる屋のわらぶきにもたれてあまたなれる夕顔
 ㉓はてしなき宮もかはらぬうき世とやわら屋にかかる夕顔の花
 ㉔こがしけん扇はしらず蚊遣火の煙ぞ見ゆる夕顔の宿
 ㉕夕顔の花のゆくへぞおもひちるやどれる露も白き扇に
 ㉖うちわたす遠方人の旅衣日も夕顔の宿やとふらん
 ㉗秋さればさく夕顔の花過ぎてみづのの浪の色ぞあせゆく
 ㉘河岸やとほきみづのの夕顔はおのれ花なる鶯ぞむれある
 全体を貫くのは、「しづが屋」「山がつの宿」「わら屋」「古屋」など、
 低い身分階層の粗末な家に咲くという把握であり、しばしば「露」
 と共に詠まれるが、これは、平安時代の和歌から変わっていない。
 正徹歌の特徴的な点は、以下の四つほどにまとめられよう。

〈美豆野の夕顔〉⑤⑥⑩⑱⑲⑳㉑

定家詠の影響によって、美豆野の夕顔を詠むものであるが、定家が、幻想の「遠方人の袖」と取り合わせていたのに対し、正徹は美豆野という場所に即し、しばしば川の波の白さと比較して歌っているところが注意される。その他、水辺の景物であり、白色である沢潟の花や鶯と取り合わせているものもある。

〈夕顔の実とその重さ〉③⑧⑪⑱㉒

次に、夕顔の花だけではなく、実に注目し、その重さを意識しながら「軒」「軒端」などの語と共に詠んだものがある。夕顔の実を詠む和歌は俊頼や寂蓮にも見られたが、俊頼詠・寂蓮詠のような滑稽は薄く、実の重みで傾いた軒を、鄙びたのどかな風景の中に、一定の風情あるものと捉えているように思われる。

〈扇と夕顔との取り合わせ〉⑦⑨⑳㉑㉒

先にふれた一群で、「源氏物語」の知識が前提となっており、鑑賞者にも当然それが理解されるものとして詠まれている。光源氏と夕顔の女君の出会いの場面だけではなく、恋の終わりまで含めた上で儂さを強調する歌(⑦)や恋の行方に言及する歌(㉒)がある。一方、白い扇から連想される月を詠む新たな展開も見られる(⑨・⑳)。

〔蚕と夕顔との取り合わせ〕②⑫⑬

正徹の新しい発想として、蚕と夕顔を取り合わせたものがある。

これは、『源氏物語』本文に夕顔の花を描写して、「白き花ぞおのれひとり笑みの眉ひらけたる」とある「眉」を、蚕の「繭」に転換していった言葉遊びで、正徹には三首の例が見られるが、以後に、蚕と夕顔を取り合わせた用例は見られず、ほとんど評価されなかったものと思われる。

〔「遠方人」の詠み込み〕①⑳

「遠方人」と夕顔の取り合わせは、先にもふれたように、『源氏物語』を媒介にして、『古今集』の旋頭歌を引いたものである。この旋頭歌に歌われる「遠方人」とは、呼びかける人の視界には入っていないものの、ずっと遠いところに佇んでいる人、ということである。しかし、正徹の和歌では、歌の現在時、物理的に遠い所に立っている人というよりも、ずっと遠くから旅をしてきて、夕顔の花の咲いている宿に到着した、という、時間を含んでの旅人のイメージを持っており、新たな展開を見せていると言えるのではないだろうか。

歌論書『正徹物語』には、次のような記述がある。

内藤四郎左衛門会に、寄衣恋に、

契りつつ送りしほどの年をへば今夜や中の衣ならまし

と詠み侍りしを皆心得ずして、「是は源氏にて侍るか」と申し

歌語「夕顔」小考

あへり。我は更に源氏と思ひては詠み侍らず。ただ人と添寝する時きる衣をば夜の衣とも中の衣ともいふ也。それを珍しくとりなして、もとあひみしが、年をへて今夜又あひて又過ぎつる方ほど年月を送らば、今夜ぞ中の衣にてあるべきと詠みたる也。今夜が真中にてあれば中の衣也といへる心也。此等をだにえ心得ぬ比おひなれば、あさましき事也。^⑦

「寄衣恋」の題で詠んだ正徹の和歌について、周囲の人々は、皆、よく理解できず、これは『源氏物語』を踏まえているのだろうか、などと言いついていたという。正徹はそれを否定し、「ただ、恋人と添寝する時に着る衣を夜の衣とも中の衣ともいうので、それを珍しくとりなし、契りを結んだ相手と年を経て今夜また逢つて、さらにまた、これまで過ごしてきたほどの時間が経つたならば、今夜こそ中（中間）に当たるだろうと詠んだのだ」と言う。自作の面白さは「中の衣」（直衣と単衣の間に着る衣）に、過去、現在、未来を通しての時間的な「中間」の意味を付加したところにあるという主張であろう。正徹は、『源氏物語』を全く意識していない、と言うが、これは、『源氏物語』の特定の場面を想定していない、ということであって、『源氏物語』の「中の衣」の用法を意識しているからこそ、それと違った詠み方をし、「珍しくとりなした」ということだと考えられる。^⑧ そもそも「中の衣」の語は、『源氏物語』以

前の和歌には用例が見当たらず、その後も鎌倉時代にはほとんど詠まれた形跡がない。そうした状況の中で、正徹が『源氏物語』の用例を意識しなかったとは言い難いだろう。『源氏物語』の和歌に見える「中の衣」の用例は「つつむめる名やもり出でん引きかはしかくほころぶる中の衣に（頭中将↓源氏）」（紅葉賀巻）、「あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがになれし中の衣を（源氏↓紫上）」（葵巻）、「かたみにぞかふべかりけるあふことの日数隔てん中の衣を（源氏↓明石君）」（明石巻）、「色々に身のうきほどの知らるるはいかに染めける中の衣ぞ（雲居雁↓夕霧）」（少女巻）、「みなれぬる中の衣と頼めしをかばかりにてやかかけ離れなん（中君↓匂宮）」（宿木巻）の五例である。これら、『源氏物語』の「中の衣」の用例は、いずれも「中の衣」そのものを指すか、「中」に「二人の仲」をきかせる技巧がとられている。そうした常套表現から離れて「珍しくとりなし」、時間的な中間を表現したのは、正徹が『源氏物語』を意識した上で開拓した新しい発想と言えよう。「遠方人」についても、物理的な距離に時間的な距離を付加しており、「中の衣」詠と同様の工夫が見られる。^④

以上のように、正徹は、夕顔に関して、『源氏物語』を取り込む場合は、主に扇にそれを集中させており、その他は、「遠方人」にしても「まゆ開けたる」にしても、『源氏物語』の本文から離れて

新しい世界を切り開こうとしていることが窺われる。定家詠から影響を受けた、美豆野の夕顔を詠む場合も、川波や沢潟、鷺などの白さを組み合わせ、粗末な家に咲くのではなく、広々とした自然の中に咲く花として、開放的な視野から捉えているようにしている。つまり、定家の夕顔詠が、隴ろげな夢のごとき幻想的な方向に向かって行ったのに対し、正徹の夕顔詠は、庶民の生活に密着して、実に注目したり、蚕を取り上げたりする現実的な方向、あるいは、現実が目の前に広がる開放的な空間を描こうとする方向に向かっていることが窺われ、夕顔という一つの素材を通して、二人の歌人の特徴がよく現れていると言えよう。

注

- ① 平田喜信・身崎壽『和歌植物表現辞典』東京堂出版 一九九四年。
- ② 『新編国歌大観』により、一部表記を改めた。和歌の引用は、以下同じ。
- ③ 新日本古典文学大系『枕草子』（岩波書店 一九九二年）により、一部表記を改めた。
- ④ 新日本古典文学大系『源氏物語 一』（岩波書店 一九九三年）により、一部表記を改めた。以下、『源氏物語』の引用は新大系本により、一部表記を改めた。
- ⑤ 新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』（岩波書店 一九八九年）により、一部表記を改めた。

- ⑥ 新潮日本古典集成『謡曲集 下』（新潮社 一九八八年）による。
- ⑦ 日本古典文学大系『歌論集 能楽論集』（岩波書店 一九六一年）により、一部表記を改めた。
- ⑧ 稲田利徳『正徹の研究』笠間書院 一九七八年。
- ⑨ 「遠方人」とは、本来、遠くの人の意であるが、時代が下るにつれて、旅人の意も加わり、『新撰寛政波集』の驛旅下には「をちかた人を送る秋風／月しろき山路に駒のおとはして 宗祇」（『続々群書類従 一五』続群書類従完成会 一九六九年）の例が見られる。また万治二年写の『流木集』には「一、をちかた人 旅人也」（濱千代清『和歌連歌用語辞書 流木集廣注』臨川書店 一九九二年）と見える。正徹が「遠方人」を旅人の意で使ったのは、これらに先立つ。